

読んでおいしい

はじめての『茶の本』

明治の知識人・岡倉天心の『茶の本』で、「お茶」を通して紹介された日本文化は、一〇〇年以上経った現代でも

学ぶことの多いものです。

今も世界中で読まれている名作の

お茶に込められた想いを読み解きましょう。

上から『対訳ニッポン双書 茶の本』(IBC パブリッシング)／『現代語でさらりと読む 茶の古典 岡倉天心 茶の本』(淡交社)／初版『THE BOOK OF TEA』茨城県天心記念五浦美術館所蔵／『英文版 THE BOOK OF TEA』(IBC パブリッシング)／『本のお茶 カフェスタイル・岡倉天心『茶の本』』(角川書店)

*稲賀執筆原稿のうち原型をとどめているのは36-37頁の「ベスト3」の部分のみ。
あとは編集部執筆で、稲賀の文責ではありません。

『茶の本』を知るための 3つのキーワード

其の1 ニューヨーク生まれ

じつはこの『茶の本』、作者の岡倉天心がボストン美術館で行なった、東洋文化を紹介する一連の講演がもとになっています。やがてその内容が雑誌に取り上げられて注目を浴び、ニューヨークにあったフォックス・ダフィールド社によって再編集されて一冊の本になりました。また天心は、座談の名手であったとも言われ、緩急自在なトークは聞き手を魅了してやまなかったとか。今でいう、話を巧みに操る落語家や芸人に近いものがあつたのでしょうか。その魅力もまた、本の中にかんなく発揮されているのです。

写真2点／茨城県天心記念五浦美術館所蔵

其の2 多彩な英語表現！

岡倉天心の豊かな英語力は、晩年には『白狐』という英語のオペラ台本を執筆したほどのものでした。たとえば同時代に活躍した夏目漱石も英語が堪能でしたが、あくまで学校教育の一環として「勉強」した英語力。しかも天心は『茶の本』を英語で書きながら、同時にさまざまな言葉遊びや比喩、美しい詩的な表現を使うなど、読む者を飽きさせない文章を駆使したのです。その味わいは日本語訳でも充分に感じ取ることができすが、韻を踏んだ仕掛けなどは原文ならではの面白さです。

上／『白狐』草稿の冒頭部分。下／当時ハーバード大学の文学修士号授与を報じた新聞。文章力に長けていたというもうなずける。

其の3 茶道書ではない!?

『茶の本』といっても、小難しい茶道の指南本の類いではないのでご安心を。岡倉天心は、全七章で構成されるこの本の中で、お茶を中心にしてさまざまな話題を軽やかに行き来しながら、日本文化がどのようなものかをわかりやすく説いています。歴史・宗教・建築・芸術鑑賞・自然・死生観など、それぞれの話題が独立したエッセイのようでありながら、その全体がまるで交響曲のように響き合い、一つに調和しているという絶妙な構成。一言では言い表せないような、とても独特な味わいに満ちた作品なのです！

生前、著者の
岡倉天心は
本名の岡倉覚三を
名乗りました。

『茶の本』って何？

What's "THE BOOK OF TEA"?

私のご案内
しましょう



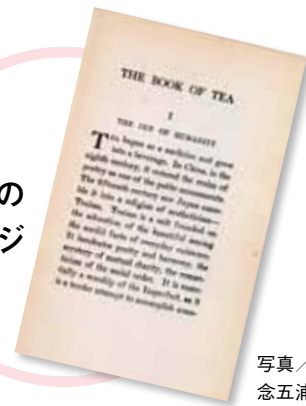
案内人

国際日本文化研究センター
副所長

稲賀繁美先生

いながしげみ／広島県生まれ。東京大学教養学部卒業。同大学院比較文学比較文化専修を修了後、パリ第七大学にて博士号取得。ジャポニズム、オリエンタリズムなどの比較文化を専門とする。著書に『絵画の黄昏』、『絵画の東方』、『接触造形論』など多数。

最初の
ページ



写真／茨城県天心記念五浦美術館所蔵

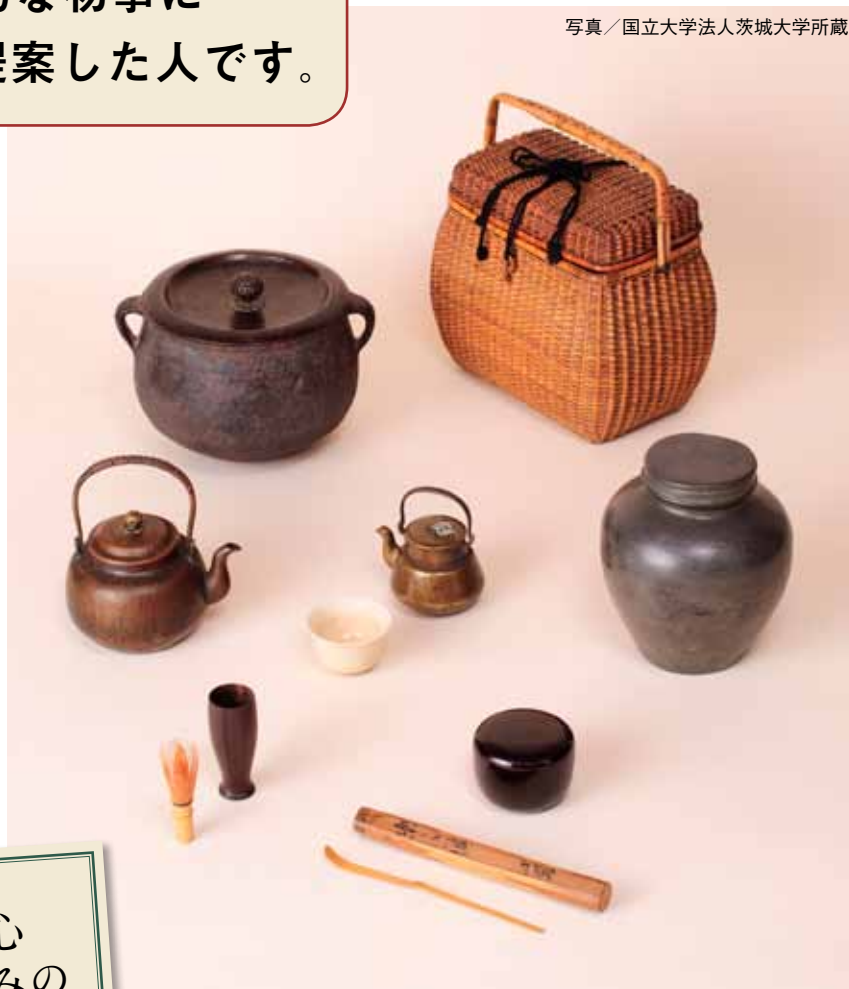
今も読み継がれる
『茶の心の本』

茶道における「お茶の心」と聞いて、何を思い浮かべますか？
たとえばお茶会では、亭主と客が「一期一会」の出会いを大切に、心の籠った一服のお茶で、寛ぎのひとときを共有します。静かな空間で、互いに尊重し合い、清らかな気持ちで、日々のさまざまなことに感謝しながら。——そういう「和敬清寂」の精神やマナーこそがお茶の心です。明治初期に出版された『茶の本』は、そのお茶の心を通じて、日本文化について世界に発信した初の書物でした。当時から世界的に高い評価を得たこの本は、多くの国で翻訳・出版。今日でも日本文化を知るためのテキストとして、世界中の人々に愛読されています。

茶の湯を通して大切な物事に
目を向けよう、と提案した人です。



写真／国立大学法人茨城大学所蔵



天心
好みの
茶道具

写真／国立大学法人
茨城大学所蔵

茶碗や釜、茶釜、茶杓、棗（なつめ）、そして茶壺や急須など、アメリカ・ボストンで実際に天心が使っていた茶道具類。茶箱として使えそうな籠もみられ、茶道具一式を入れて茶会に持ち出し、異国の地でも天心なりにお茶を楽しんでいたことがうかがえる。

明治時代に活躍した美術研究家・岡倉天心。彼の世界を股にかけた人生は、この本の持つ魅力に大きく関わりました。

幕末の開港地・横浜に生まれた天心は、幼い頃から英語を母語のよう^{はご}に習得します。また、茶道や仏教など日本文化の教養も身に付け、今の東京大学を経て文部省の官僚になると、日本の美術行政をカリスマ的にリードしました。その後、アメリカに渡った天心はボストン美術館で働きますが、そこで直面したのは、欧米人が日本を「サムライの国」程度にしか認識していないという悲しい現実でした。天心は、欧米社会へ日本文化の奥深さを伝えることを自らのミッションとし、講演会や執筆活動に精力的に取り組みます。

その集大成として、天心自身の「茶の湯」への深い理解とともに、東西共通の飲み物である「お茶」を伝達ツールとして、明治三九（一九〇六）年、『茶の本』が誕生したのでした。

世界の人々に、真によき日本を知らしめる『茶の本』。それは同時に、私たち現代の日本人にとっても、忘れかけていた大切なものを思い出させてくれる一冊なのです。

『茶の本』を書いた



岡倉天心って誰？

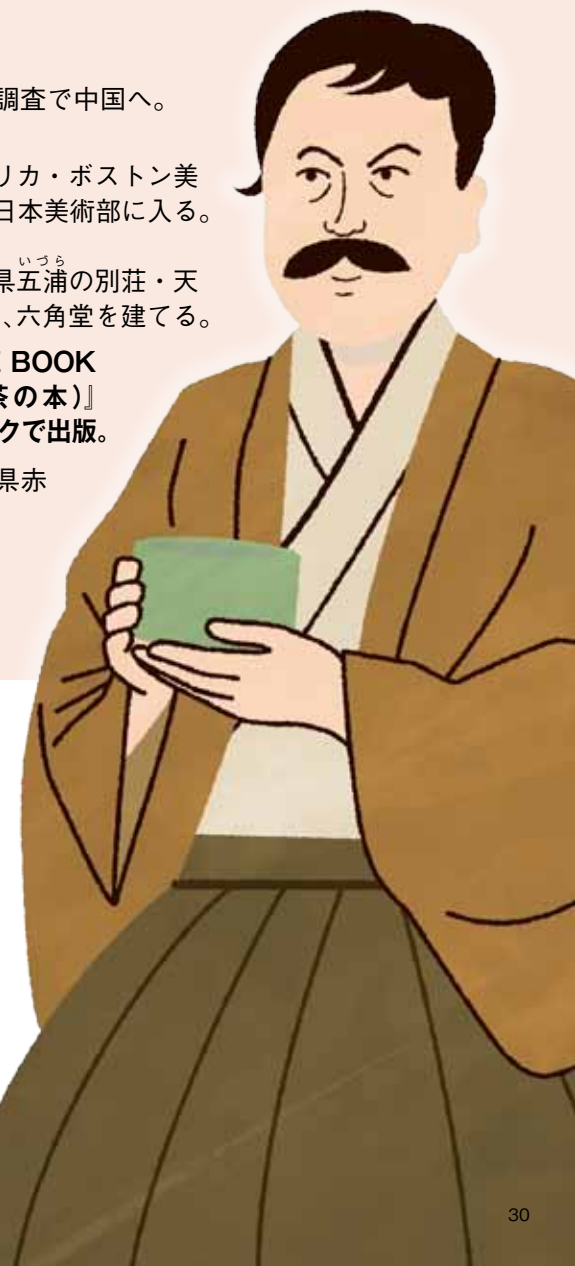
Who's Tenshin Okakura?

和服姿でお茶を楽しむこの男性をご存知ですか？ 世界を見すえ、日本人の誇りをもって生きた明治の知識人・岡倉天心です。彼の人生から『茶の本』をひも解いてみましょう。

天心の一生

- 1863年 (文久2) 神奈川県横浜に生まれる。
- 1869年 (明治2) 6歳。宣教師の私塾^{しじゅく}で英語を学ぶ。
- 1875年 (明治8) 12歳。東京開成学校^{かいせい}（77年から東京大学）に入学。
- 1879年 (明治12) 16歳。大岡もとという女性と結婚。この頃から茶道を習う。
- 1880年 (明治13) 17歳。東京大学文学部を第1期生として卒業、文部省に勤務。
- 1886年 (明治19) 23歳。欧米の美術視察へ。

- 1893年 (明治26) 30歳。美術調査で中国へ。
- 1904年 (明治37) 41歳。アメリカ・ボストン美術館の中国・日本美術部に入る。
- 1905年 (明治38) 42歳。茨城県五浦^{いづら}の別荘・天心邸を新築し、六角堂を建てる。
- 1906年 (明治39) 43歳。『THE BOOK OF TEA（茶の本）』をニューヨークで出版。
- 1913年 (大正2) 50歳。新潟県赤倉にて永眠。



右／天心は釣りをこよなく愛した。上／晩年を過ごした天心邸（右）と思案用に使った六角堂（左）。



写真2点／茨城県天心記念五浦美術館所蔵



鎌倉時代、栄西によって日本にもたらされた喫茶文化は、室町時代に禅道・禅主義と結びついて茶道となり、その後のさまざまな日本の芸術文化に影響を与えます。

その茶道の背景には中国の老荘思想や道教思想、禅道の教えが、茶道の根本にあるといっています。

第三章 道教思想と禅道

Zennism (禅道、禅主義)は天心がつくった言葉なんですよ！



茶道の哲学を具体的に表した空間である「茶室」について説明しています。

構造や装飾も西洋建築とは大きく異なった質素な造りの茶室。その設えや露地、屋根の低さに至るまで詳細に例を挙げながら「簡素さ」と「純潔さ」の美を伝えています。

第四章 茶室

第五章

芸術鑑賞

お茶から離れ、芸術鑑賞について論じています。

西洋の芸術が画家の自己表現であるのに対して東洋の芸術作品は、水墨画にみられるような色彩を制限することで逆に自然豊かな色彩を想像させているといっています。



第六章

花

「花はいつでも友である」と天心は言います。私たちは花とともに「食べ、飲み、歌い、踊り」「花なしでは生きていけない」と論じています。

茶道から派生した生け花では「派手な花」は茶室から追放され、いかに花を自然にそ



最後の章では、茶人の美学について「真の芸術鑑賞」とは「芸術を暮らしの中に活かす」ことだと述べています。

また、「美しいものと生きただけが、美しく死ぬことができる」と、千利休の最期の茶会を例に挙げて『茶の本』は締めくくられています。

第七章 茶人たち



のまま活かせるかという「自然との共生」の考えであり、人の思うままに加工するフラワーアレンジメントとは真逆の考え方です。

『茶の本』に書かれているのは？

『茶の本』には、お茶の歴史や哲学、芸術などさまざまなテーマが書かれています。全7章のあらすじをご紹介します！

- 第1章 人間性を盛る一碗
The Cup of Humanity
- 第2章 茶の流派
The Schools of Tea
- 第3章 道教思想と禅道
Taoism and Zennism
- 第4章 茶室
The Tea-Room

- 第5章 芸術鑑賞
Art Appreciation
- 第6章 花
Flowers
- 第7章 茶人たち
Tea-Masters

「お茶」を通して日本人の精神を語る

第一章 人間性を盛る一碗

「お茶」という文化の意義を当時の西洋の著名人や事件を交えながら記した『茶の本』。その始まりの章です。

お茶は、平凡な日常生活の中に、美しいものを見つけようと憧れる「生の術」であり「不完全なもの」だからこそ無限の可能性があると説いています。



第二章 茶の流派

お茶の発展の歴史を説明しています。

四〜五世紀に中国で生まれた喫茶文化は、唐・宋・明の時代順に「煮る茶」、「泡立てる茶」、「浸出させる茶」と三つの進化を経て現在の形にそれぞれの時代の「理想」を表しています。



現在に近い「浸出させる茶」

抹茶の原形「泡立てる茶」

鍋で煮出した「煮る茶」

稲賀先生の お気に入り ベスト3

多彩な表現がいっぱいの『茶の本』。最後に稲賀先生にお気に入りの言葉を教えてもらいました！

人間性を盛る一碗

A cup of humanity



第一章の題名にもなっている言葉です。「人間性の器」や「人情の碗」などとも訳されますが、「A cup of tea (一杯の茶)」に脚韻を踏んで用いています。

一杯の茶とは英語でいうところの「日常茶飯事」のニュアンスを持っており「人間の性」というものは、こうした茶飯事に宿る」というメッセージが込められているのです。

『茶の本』の前に執筆された『日本の覚醒』では「人間性の暗闇」という言葉で、日露戦争時の暗い世相を表わしていましたが、『茶の本』では、暗闇の中にひとつ灯る小さな希望が、一杯の茶碗に託されたのでしよう。

おすすめ 入門書3冊

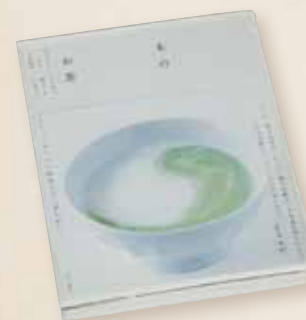
今も、多くの日本語訳が出されている『茶の本』。その中でも、「さらり」と読めることに重点をおいた一冊です。

茶人である筆者のわかりやすい文章と注釈に加え、章ごとに小見出しがついて読みやすい工夫が満載。



さらりと読める 日本人の生き方

現代語でさらりと読む茶の古典
岡倉天心 茶の本
田中秀隆 訳
淡交社 1,200 円 (税別)



美しい写真と 心に響く おいしい抜粋

本のお茶
カフェスタイル・岡倉天心
『茶の本』
川口葉子 抄訳・文／藤田一咲
写真／三枝克之 企画編集
角川書店 1,600 円 (税別)



原文と 日本語訳で 「ニッポン」を 堪能する

対訳ニッポン双書
茶の本
松岡正剛 訳
IBC パブリッシング
1,200 円 (税別)

道は、通路というより 通り道の中に存在するものである

The Tao is in the Passage rather than the path



第三章で道教思想の「道」を説明している一節です。

「道」というのは「小径」ではなく「通過のうちに在る」と説いています。つまり道は名詞ではなく動詞だということです。

人はどうしても、道や悟りを目に見えて手に掴める、まるで秘伝の巻物か何かのように勘違いしてしまいがちですが、変幻自在の雲のような現象だというのが天心の主張です。

また、道教のシンボル・龍を使い、「Cosmic Change (大宇宙の変転)」という言葉で、道は常に自分自身に戻ってくるものの、復活と新生だとも説明しています。



空虚

Emptiness

『茶の本』で一般的によく知られている言葉がこの「空虚」でしょう。

家は空虚だからこそ人は棲むことができる、器が空っぽだから物の受け皿となる、という意味で使用されています。これは中国古典の老子『道德経』に見られる表現です。

天心は茶室を指す「数寄屋」を「Abode of vacancy (空っぽの棲まう処)」と解説しています。「実」の存在にこだわる西洋哲学の考え方に辟易としていた天心が東洋の「空虚」に宿る精神を説き、東西思想を対比させています。